

九
九

か 11

課員

0

16

後
身
部
一
部

臺北陸軍病院履歴ノ概要

昭和十一年四月
臺北陸軍病院

禮

1756

臺北陸軍病院履歴ノ概要

昭和三四

一 沿革

(一) 創設

明治二十八年五月二十日此白川宮能久親王殿下、
統率シ給テ征討軍並衛師團臺北城ヲ占領スル也
第一野戰病院ヲシテ六月十七日現在ノ第一高等女
學校附近當時ノ臺北城内東南ニ位スル文武兩廟
内ニ舍營病院ヲ開設セラレ多數ノ戰傷病者ヲ收容
セリ

(二) 臺北兵站病院

明治三十八年七月二十六日軍ノ南進ニ伴ヒ該師團ノ
衛生豫備員ヲ以テ之ニ代リ兵站病院ヲ設置シ
十二月臺北舍營病院ト改稱シ翌二十九年三月臺灣
衛戍病院條例公布セラレ及ビ四月十二日臺北衛
戍病院ト改稱ス之ヲ以テ當院ノ開創トス此ノ間
收容シタル戰傷病者ハ實ニ壹萬六千六百三十名ニ

三) 臺北衛戍病院

及ヘリ

始メ舍營病院ハ臺北城外小南門ヨリ南ニ距ルコト
三十米舊寺院趾ニ設置セラルタルモ堂宇及假舎
ノコト、テ病院トシテ遺憾ノ点多キヲ以テ明治三二
年四月二十六日現在地(元本院)ニ約二万二千九百四
十三坪ノ地ヲ卜シ病院建設工事を着手翌年三
年三月三十日落成ス

コノ地ハ清曆慶十三年(紀元一四五六年)清國本土ニ
於ケル臺協右營ノ遊撃隊移駐セシ處ニシテ道光
五年(紀元一八五五年)參府署ノ演武館海山館アリ
シ處ナリ現在ノ建物ハ大正八年十月改築ニ着手
十年七月竣工セルモノナリ新設當時ハペストコレラ
マラリヤ等惡疫屢々流行全島非衛生的瘴癘
ノ氣充盈シカフルニ衛生思想之シク之ガ防疫關シ

想像以上ノ苦闘ヲ重テ就中、明治三十五年七月
南庄討伐四十年、レモカレ土匪蕃群討伐四十二年
カオカレ蕃討伐大正三年、大魯閣蕃討伐昭和五
年、反抗霧社蕃討伐等ニ、毎回衛生班ヲ派遣シ
班員又其ノ任務ヲ貫徹シ酷暑ノ中、嶮阻峻坂
ヲ冒シ危険ヲ顧ミス第一野救護勤務ニ服シ
完全ニ其ノ使命ヲ達成スル等、本島統治ノ大
貢獻スル處、甚カラズ又明治四十三年、大正三年、昭和
十一年、ニ畏クモ侍從、御差遣ヲ辱クスルノ外、昭和
三年、ニ特命檢閲使トシテ久邇宮邦彦王殿下ヲ
迎ヘ又院内ニ肖楠ノ御手植ヲ遊サレ等、数度ノ光榮
ニ浴ス。

昭和十一年十月、衛戍病院令改正ニヨリ陸軍病院ト
改稱ス、當時ハ臺中、宜蘭、北投、ニ分院ヲ有シ、
創設以來、昭和十一年末迄ノ患者、累計、三万九千

(四) 臺北陸軍病院

五百四十七名ヲ算シ平均年九百名ノ患者ヲ收容セリ
總患者收容定員百六十名トス

昭和十二年七月支那事變勃發スルヤ新ニ圓山
老松一中日赤南門分室ヲ増設シ多數ノ事變
患者ヲ收療セリ

又昭和十六年十二月大東亞戰爭開始ニ當リ本島ハ
南方推進基地トシテ重要ナル地位ヲ占ムルニ及ビ
圓山分室ヲ圓山分院ニ昇格セシメ更ニ大婁、東門
分院ヲ開設シ老松一中日赤南門分室ヲ閉鎖シ
通過部隊ノ患者並南方ヨリノ還送患者ノ收療
態勢ヲ整備ス

開戦ヨリ終戦迄ニ收容セル患者實ニ一萬二千六百十二
名ニシテ當院職員ノ死亡者三十六名(内戦死、戦病死
十八名)ヲ算セリ

昭和十九年四月間臺灣軍ハ作戰軍トナリ大本營ニ
 主屬シ戰闘序列ヲ令セラレルニ至リ 醫院モ昭和十九
 年四月ヨリ同年八月間臺灣所屬戰闘ニ参加ス
 米軍飛行機ニ依リ本島空襲ノ熾烈化セラルヲ豫
 想シ昭和十九年末ヨリ病院疎開ヲ開始シ終戦直
 後ニ於ケル分院(分室)拾箇前ニ及ベリ
 終戦直后第九師團(第一三四FL)及第六十六師團(第
 二FL)ノ各野戰病院 北投航空病院 第二三兵站病院
 臺中陸軍病院大湖分院ヲ分院トシテ轉屬セシメラレ
 爾后日本歸還準備トシテ患者ノ内地還送ニ伴ヒ
 逐次分院(分室)ヲ閉鎖ス
 昭和二十一年三月十日復員ヲ令セラレ患者ノ日本還
 送業務並ニ中國側ヨリノ接收ヲ完了シ主力ハ昭和二
 十二年四月十日基隆出港四月二十日鹿兒島ニ上陸

四月高日附復員完結又

(五) 歴代病院長、官名、左、如、

歴代病院長

明治十九年三月	一等軍醫正	梶井 恒	大正七年十二月	一等軍醫正	三河内諒一
明治十九年三月	三等軍醫正	松本三郎	同 土年八月	同	井上隼雄
同 二十年三月	二等軍醫正	司吉左久馬	同 五年七月	同	赤松得三郎
同 二十年五月	同	林 代次郎	昭和二年七月	同	藤川勝馬
同 二十年九月	同	今村(緝熙)	同 四年八月	同	伊藤 止
同 二十年八月	同	村井筆之助	同 六年八月	同	米澤米治
同 二十七年四月	同	森波 繁	同 十年八月	同	武内三千春
同 二十八年十月	同	大橋豊三郎	同 十五年八月	同	吉野三郎
同 二十九年十月	同	長宗我部俊城	同 十五年四月	軍醫大佐	山田 昇
同 四十二年三月	同	村井 徳壽	同 十六年三月	軍醫大佐	松室守義
同 四十四年五月	同	村上 潔	同 十七年八月	同	大坪美登
大正元年十月	同	中村 幸吉	同 十九年二月	同	大石一朗
同 三年六月	同	又重 完吉			田崎貞夫
同 五年四月	同	藤井善一			

二 指揮隸屬關係及其變遷ノ概要

年月日

明治六・六・二七

指揮隸屬關係及其變遷

北省川宮能久親王殿下御統率ノ征討軍並衛師團
 第野戰病院要員ヲ以テ台北城内文武廟内ニ令テ此
 病院開設

明治八・七・二六

該師團ノ衛生豫備員之ニ代リ兵站病院設置

明治八・二・

台北合營病院ト改稱

明治九・四・一

台北衛戍病院ト改稱

昭和二・一〇・

台北陸軍病院ト改稱

昭和九・四・一

台灣軍ハ作戰軍トナリ大本營ニ直屬シ戦闘序列ヲ

令セラレ台北陸軍病院ハ台灣軍隸下ニ入ラシメラル

昭和九・九・一七

台灣軍ハ第十方面軍ノ隸下ニ入ラシメラル

昭和二〇・九・一七

戦闘序列ヲ解カル

三參加セル主要作戦(戦闘)ノ概要 死傷損耗

(一) 明治三十八年五月二十九

台湾征討(北谷川官能親王殿下御統率)ニ從軍(初ノ免
ニ合當病院開設次第兵站病院トナリ更ニ台北衛戍病院ト
改稱)收容戰傷病者一七六三名

南庄討伐ニ衛生班派遣

(二) 明治三十五年

レモカン土匪蕃討伐ニ衛生班派遣

(三) 明治四〇

ガカガニ蕃討伐ニ衛生班派遣

(四) 明治四三

大魯閣蕃討伐ニ衛生班派遣

(五) 大正三

反抗蕃社蕃討伐ニ衛生班派遣

(六) 昭和五

支那事變患者收療

(七) 昭和一二

大東亞戰爭患者收療

(八) 昭和一二

台湾防衛戦闘参加

當院ニ於ケル收容患者数並職員中死傷者ノ状況左表ノ如シ

職員	收容患者数		區分
	死傷	其他	
調査資料	三九	五四七	自明治三十八年五月二十九日迄昭和二十一年六月三十日迄
調査資料	一	六	自昭和二十一年六月三十日迄昭和二十六年八月三十一日迄
調査資料	一	七	自昭和二十六年八月三十一日迄昭和三十一年三月三十一日迄
調査資料	一	八	自昭和三十一年三月三十一日迄昭和三十一年八月三十一日迄
調査資料	一	〇	自昭和三十一年八月三十一日迄昭和三十一年十二月三十一日迄

四 給養及衛生

(一) 給養

臺灣ハ地理的關係ニ惠レ豐富ナル食糧ノ生産ニ依リ給養ハ良好ニ維持セラレアリタルモ今次大東亞戰爭勃發ニ伴ヒ臺灣防衛軍ノ增強ニ依ル食糧需要ノ増大ト民間勞力ノ軍需振向等ノ爲ニ生産能力低下シ加之米潜水艦並ニ米機ニ依ル海上封鎖地上施設ノ爆破等ニ依ル食糧物資ノ移入ハ極度ニ阻害セラレ茲ニ本島食糧事情ハ急迫ノ一途ヲ辿ル而シテ昭和三十年五月ハ主食(精米)四五〇瓦 同十八月一日ヨリハ更ニ四〇〇瓦ニ減量スルト共ニ軍命令ニ依ル現地自活態勢ノ強化ヲ圖リ敵本島上陸作戰ヲ豫想シ戦力維持ニ銳意努力カシアリシ處隅々同月十五日終戦トナリタリ終戦後ノ日軍食糧取得ハ益々困難ヲ加フルコトヲ豫想シ現地自活態勢ヲ更ニ強化スルト共ニ主食(精米)ヲ一般部隊

八四〇〇瓦陸軍病院其他各部隊ハ三三〇瓦ニ減量セラレ
 タルモ終戦後ノ物價高騰（終戦前ノ十倍）ト日銀券ノ
 凍結（昭和二〇二）並ニ本省人地主ヨリ現地自治ノ為ノ借上耕
 地返還要求等ヲ受ケ副食物（特ニ魚肉）ノ調辦意如
 クナラズ一時ハ憂慮スヘキ状態ナリシモ昭和二十年十二月下
 旬ヨリ昭和二十一年一月二十五迄六日單採有米ヲ以テ主食
 六〇〇瓦ヲ給スルコトヲ認めラレ爾后ハ中國側ニ於テ給養
 ヲ担任セラレルロトナリタルヲ以テ給養上小康ヲ得タリ
 然レ共昭和二十一年一月二十五以降ニ於ケル中國側ノ糧食
 補給ハ早急ニ實現ヲ豫想シ得サル狀況トナリタルヲ以テ
 昭和二十一年一月二十日ヨリ再ビ主食（精米）五〇〇瓦ニ減量スルニ
 至レリ大東亞戰爭間ニ於ケル給養量並ニ糧食ノ變更狀況表
 ノ如シ

年月日	精米	精麥	賄料
19.1.1	660	186	21.5
4.1	780	0	32.7
7.1	705	0	32.7
10.1	705	0	36.0
20.4.1	705	0	56.1
3.10	520	0	56.1
5.25	450	0	56.1
8.1	420	0	56.1
9.1	420	0	75.0
11.0.1	330	0	75.0
11.1	330	0	200
12.1	420	0	200
12.15	600	0	200
2/1.10	500	0	200

1767

(二) 衛生

衛生ニ關スル戰史資料別冊ノ如シ

五 終戦ヨリ歸還途ノ行動概要

(一) 終戦時ニ於ケル病院ノ現況左表ノ如シ

院名	場所	施設	収容力		備考
			長	普	
本分院	場	國民學校	二七〇	一六二	
水院	文山郡新高街	國民學校	一九三	四七	
屋尺分室	文山郡屋尺	國民學校	九四	九〇	台北市内 收容據点
南門分室	台北市南門外	元興	一一九	一〇五	
圓山分室	台北市圓山	巴拉のク	一六七	五〇〇	
中和分院	海山郡中和庄	臨時捕獲物	五〇〇	二二〇	
板橋分室	海山郡板橋街	國民學校	一九二	五七	
烏來分院	ウライ基地	同	三三三	一五〇	
新店溪分院	文山郡塗潭	臨時捕獲物	二〇〇	一〇〇	昭三〇八〇開領
橫峯分室	文山郡橫峯	茶工場	二〇〇	一〇〇	
北投分院	七里郡北投	國民學校	三六八	一五二	
赤十字病院	海山郡安坑	國民學校			
計					

(二) 病院ハ終戦ニ伴ヒ承諾必謹、一途ニ盡シ、病院長ヲ核心

トマル團結ヲ鞏固ニシ本來ノ任務ヲ續行スルト共ニテ

復員準備トシテ病院所屬ノ特設警備部隊ノ召集

解除一部軍人ノ現地除隊ノ召集解除、雇傭人ノ解

雇傭ヲ實施ス

(三) 終戦後軍命令ニ依リ新ニ第九師團第六四及第六

十六師團第三野戦病院、北投航空病院、第二二兵站病

院、台中陸軍病院太湖分院ヲ夫々分院トシテ轉屬セシメ

ラレタリ

又第九師團野戦防疫給水部外四部隊復員ニ伴ヒ

將校以下一七七名轉屬セシメラル

(四) 十二月初旬ヨリ中旬ニ亘リ本分院ハ中國臺灣區特派員辦

公處接收委員吳國興上校ニ依リ第一次接收ヲ實施

セラレタリ

(五)

當院ハ台灣中部以北、患者處理為全員日本歸還
 時迄殘置セシメラレ職員以下ハ患者護送員トシテ逐次
 歸還セシメ主力(病院長以下二百十名)日僑患者處理
 為日僑歸還完了時迄殘置セシメラレ
 終戦後於ケル患者日本還送状況左如シ

次別	内還年月日	還送患者数	送		軍属	計	摘要
			將校	兵			
ノ	昭三二一七	一五〇	八	二	五〇	七〇	
ハ	昭三一三三	四九五	七	二	五〇	七〇	
ニ	昭三一三五	一九八	二	二	一八	二〇	
ホ	昭三一四〇	二二五	三	二	一〇	五〇	
ヘ	昭三一四〇	一〇八	五	八	三七	五〇	
ヘ	昭三一四〇	四三三	二六	四	一二二	一六九	
ヘ						二五七	
ヘ							
ヘ							
備考	昭和三十二年四月二十日以下戸軍内患者、日本還送ヲ完了ス						

(六) 昭和二十一年三月十日復員ヲ令セラレ日本歸還業務ノ
促進ヲ圖ル爲本院中和分院、南門分室ヲ除ク爾餘ノ
分院ノ分室ヲ閑鎖シ本院ハ昭和二十一年三月十三日北投
分院跡ニ移轉任務ヲ續行スルト共ニ日僑患者ノ處理
ニ任シ昭和二十一年四月十日本院ノ第二次接收ヲ完了
同月十日軍内患者並ニ日僑患者ノ日本還送ヲ終了シタル
ヲ以テ病院主力ハ昭和二十一年四月五日乗船出港同月五日
上陸同日附復員ヲ完結ス

終戦后ニ於ケル本院ノ閑鎖状況左ノ如シ

本分院閉鎖狀況一覽表

分院名	所在地	閉鎖年月日	備考
木	文山郡新店街	昭三、三、二五	
南門分室	台北市南門町	昭三、四、七	
厩尺分室	文山郡厩尺	昭三、三、一三	
中和分院	海山郡中和庄	昭三、四、五	
板橋分室	海山郡板橋街	昭三、〇、二一	
新店溪分院	文山郡淡江潭	昭三、三、九	
日赤分院	台北市泉町	昭三、二、五	
日赤安換分室	海山郡安坑	昭三、二、五	
烏東分院	文山郡烏東	昭三、一、二五	
北投分院	文山郡北投街	昭三、三、二二	
宜蘭分院	宜蘭市	昭三、三、二二	
三星分室	羅東郡三星庄	昭三、六、一八	
大坡分室	海山郡礁溪庄	昭三、〇、一	
中壢分院	中壢郡中壢	昭三、一、一九	閉鎖時、一九四九年、日本編入、指揮下。
大溪港春養所	大溪郡大溪	昭三、一、一三	
坪林分院	新竹郡關西庄	昭三、一、二五	
湖口普濟養所	新竹郡湖口	昭三、〇、二一	
新竹分院	新竹市坤頂	昭三、一、一三	
冷水坑分院	新竹郡五股庄	昭三、一、二〇	
湖分分院	新竹州大湖	昭三、四、三	昭三、一、五 高層轉庫

六 其他部隊ノ經歷中特異ト認めラルル事項

- (一) 當院ハ臺灣阜也ニ於ケル最大病院ニシテ大東亞戰爭ノ
推移ニ伴ヒ患者ノ内地還送不如意トナルヤ島内最
右ノ收療病院トシテ常ニ重要ナル地位ニ在リテ診療
並ニ衛生部員ノ教育ニ從事ス
- (二) 終戰后各隊ノ日本歸還ニ伴ヒ入院中患者全員ヲ
收容中ノ陸軍病院ニ轉屬セシメラレ以テ部隊ノ
係累ヲ除キ救正齋ナル日本歸還ニ寄與セリ